

【ポスター発表】

## 「空気のバリアフリー」と社会福祉の専門職

○ 立命館大学生存学研究所 三島 亜紀子 (3829)

[キーワード] バリアフリー・社会福祉専門職・香害

### 1. 研究目的

多様な人が社会に参加する上での障壁（バリア）をなくす、バリアフリーについての解説に、「4つのバリア」について言及されることがある。すなわち、「物理的なバリア」「制度的なバリア」「文化・情報面でのバリア」「意識上のバリア」である（内閣府大臣官房政府広報室 2018）。本報告が焦点を合わせるのは、「物理的バリア」のうち、階段や急こう配の通路などのように目に見えるものではない、空気中の化学物質（揮発性有機化合物）というバリアである。

「論争中の病」の一つである「化学物質過敏症」の患者は、この見えないバリアのために福祉・教育・医療サービス、労働市場や地域社会などから排除されている現状である（寺田 2016, 三島 2021）。最近では国が「香害」の周知と香り製品の自粛を求めるポスターを作成して話題となったが、合成香料が喘息患者やアトピー患者、アレルギー体質の人に悪影響を及ぼすことが明らかになっている（Caress & Steinemann 2009, Flegel & Martin 2015）。また感覚過敏のある人や、発達障害児者のうち嗅覚過敏のある人にとっても、汚染された空気は社会的障壁といえる。

近年、教育機関での「空気のバリアフリー」の取り組みは進んできたが、福祉施設の場合は、概して福祉施設の管理者は空気質環境への認識は高いといえないと指摘されている（阪東他 2014）。また、職場にもよるが個々の社会福祉専門家の意識は高いといえず、社会福祉の専門家養成課程においても、これまでほとんど言及されることはなかった。

本報告では、空気中の化学物質（香料を含む）がバリアとなる、化学物質過敏症や発達障害者をはじめとする弱者が社会から排除されないように、福祉専門職としてできることは何か考察することを目的とする。

### 2. 研究の視点および方法

本研究の研究方法は文献研究である。上記目的に関する文献を精査した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理規程に則って実施した。

#### 4. 研究結果

社会福祉実習の事前学習では、「実習生らしい服装を心がけよう」などと身だしなみに言及されることがある。福祉実習のテキストを精査すると、なかには「頭髪を染めない」「厚化粧やマニキュアはしない」など個人的な選好に踏み込む記載もある。各大学等で用いられる独自の実習の手引きや授業中に、「香水をつけない」との指導もあるかも知れない。とはいえ、あくまで華美なドレスコードを避けよという指導であり、たとえば香料入りの柔軟剤の使用が「実習生として相応しくない」と認知されることはないと考えられる。

#### 5. 考察

化学物質過敏症の患者のうち、社会的支援を受けている人の方が、受けていない人よりも QOL が高いという結果が出ている（横井 2016）。患者や患者家族への支援は、患者の QOL を高めて社会参加を可能にするためにも必要と考えられる。

アメリカやカナダ、ヨーロッパの国々の公的機関や民間企業、病院などで、「フレグランス・フリー・ポリシー」や「ロー・セント・ポリシー（極力、香りを抑える方針）」が普及し始めた。たとえば、初の PSW を養成した高等教育機関であるスミス・カレッジでは、ホームページでもフレグランス・フリー・ポリシーを掲げている。日本でも今後、施設管理者と専門家個人の二側面からの意識の向上が求められる（三島 2022）。

#### 文献

阪東美智子・金勲・大澤元毅（2014）「特別養護老人ホームにおける環境衛生管理の現状と課題」『保健医療科学』63(4), 359-367.

Caress, S. M. & Steinemann, A. C. (2009) Prevalence of Fragrance Sensitivity in the *American Population, Environmental Health*, 71(7), 46-50.

三島亜紀子（2021）「大学キャンパス内の空気の問題」『CS 支援（認定 NPO 法人 化学物質過敏症支援センター会報誌）』120, 1-4.

三島亜紀子（2022）『保健・福祉・心理専門職のための「空気のバリアフリー」——シックハウス症候群・化学物質過敏症の当事者の声を聞く』金糸雀ブックス.

内閣府大臣官房政府広報室（2018）「知っていますか？街の中のバリアフリーと『心のバリアフリー』」（<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201812/1.html>, 2022.6.7）.

寺田良一（2016）「化学物質過敏症患者の『二重の不可視性』と環境的『社会的排除』」『明治大学心理社会学研究』12, 61-77.

横井弓枝・今井奈妙（2016）「化学物質過敏症患者の Quality of Life——自覚症状・レジリエンスとの関連」『臨床環境医学』25(1), 29-33.

\*本研究は三菱財団（社会福祉事業・研究）の助成を受けたものです。